

松本亦太郎と教育心理学

法政大学社会学部兼任講師 安齊 順子

これまで心理学史として3回にわたり教育心理学のルーツを探ってきた。今回は以前に紹介した城戸幡太郎の恩師である松本亦太郎を取り上げる。

1. 松本亦太郎

松本は1913年に東京帝国大学の心理学の教授となった。それ以前は京都帝国大学の教授をしていた。この時期、心理学では知能の研究が行われるようになっていた。これまで示してきたように、心理学は明治期の翻訳紹介時代を終え、元良によって心理学教室として大学生を迎え、日本で研究をする素地が作られてきた。松本は意識と行動の相互作用である精神的動作について論じ、研究を行った。また『智能心理学』（1925）を発表した。

松本が留学から日本に帰った1900（明治33）年は高等師範学校で学則が改定され、心理学、応用心理学に加えて実験心理学が科目となった。この時点では「教育心理学」という名称ではなく、教員となる学生に「心理学」「応用心理学」「実験心理学」が教えられていたことに注意が必要である。彼はヴントの心理学に加えてスクリプチュア、ティチナー、ストラットンらの心理学を講じた。留学中には伊沢修二の依頼で「教育の学校」（高等師範学校）のために心理学の実験機材を集めたという。松本は1896（明治29）年にアメリカに留学したが、それは心理学の実験方法を学ぶためだった。1895年に来日したイエール大学のラッドに留学の意思を知らせ、その後スクリプチュア（Edward Wheeler Scripture）に師事し、イエール大学で「音空間の研究」で博士号を取得した。スクリプチュアはヴントのもとで学んだ心理学者であり、バンダービルトスピーチクリニックにも関係していた。

その後高等師範学校の校長の配慮で、官費留学でドイツに行くことが決まり、松本はライブチヒのヴントの元に移動した。心理学を直接の目的として命じられた海外留学はこれが日本で初めてであった。松本は「ライブチヒの心理学道場に一度入ってみないと気がすまないような心地がした」と述べている（佐藤、溝口、1997）。

松本の日本での活躍時期は知能の研究が充実してきた時期である。まず知能研究の流れを素描する。

2. 知能研究の歴史

知能をはかるという試みを初めて行った（1905）のはフランスのビネであり、その本来の目的は小学校に上がる子供たちが授業についていけるかどうかを調べるということであった（安齊、2007）。本来は個別指導のためにデータが使われるのであるが、知能検査は一般的な「頭の良さ」を調べるためのものと思われるようになっていった。テストはアメリカに渡り、シュテルンによって「知能指数」が創設された（1912）。知能観の変遷としては、スピアマンによって1904年に知能構造論が発表され、知能は一般因子と特殊因子に分けられた。スピアマンは1100名の児童に94種類の検査を実施して、その成績の相関を調べ、2因子を仮定した。各検査ごとに働く特殊因子と、経験の理解・関係の抽出・相関の抽出の働きをする一般知能因子の二つに大別できるとした。のちの研究でスピアマンは更に群因子（言語能力、数能力、機械的能力、注意力、想像力）の5つがあることを明らかにした（昇地他、1987）。この時期はコンピューターの開発による心理学の因子分析の発展の時期と重なっている。

サーストンは218名の大学生に57種の知能検査を実施して13の知能因子を取り出した。彼は、様々な知能検査を調査した結果、人間の知能は言語、数、空間、記憶、推論、知覚などを因子としてあげ、因子分析によって人間の知能は明らかにできるとした。例えばウェクスラー法の知能検査では言語、算数、数字の記憶、パズルを使用した推論の機能などを現在も調べている。その後ギルフォードは、知的操作（Operation）（認知、記憶、拡散的思考、収束的思考、評価）、所産（Product）（単位、類、関係、体系、変換、含意）、内容（Content）（図形的、記号的、意味的、行動的）などの要素を3次元のサイコロのような図で示し、知能を多因子的な存在として表現した。心理学の研究としては知能は多次元的なものと捉えられていったが、一方で「知能指数」が数字で表現されることにより、知能指数が高ければ天才であるなど、一元的な理解が行われるような誤った理解も生まれていった。

アメリカではウェクスラー式知能検査が開発された。

この「ウェクスラー・ベルビュー知能尺度」(1939)は病院で患者のデータを大量に集めて作成された。検査結果を動作性検査、言語性検査の二種類に分類することができる。

第一次世界大戦のころにはヤーキスの主導のもと、「アーミーアルファ」と「アーミーベータ」という集団式知能検査が開発され、軍隊で利用された。日本の田中ビネー式知能検査はこの検査に大きな影響を受けている。

心理学者の努力にも関わらず、知能は固定的で変化しない、一元的なものであるという批判や、誤解が相次ぎ、知能に関して新しい理論が作られるようになった。認知心理学者のガードナーは、8つの相互に独立した知能を提唱した(1999)。8つとは、言語的知能、音楽的知能、論理的・数学的知能、空間的知能、身体的・運動感覚的知能、对人的知能、個人内知能である。例えば对人的知能では障害児であったヘレン・ケラーを指導したサリバン先生が例として挙げられている。運動感覚的知能ではスポーツ選手なども知能が高いことになる。また音楽的知能ではピアニストや演奏家も知能が高いことになる。このように知能検査への批判を受け、概念を拡大した研究も存在したが、一般的な「知能」という概念と離れているため、またその測定が難しいため(観察によって測定する)、研究が難しくなっている(安齊、2007)。

近年では発達障害などの問題に対応するため、「適応行動」を調べる尺度が開発、翻訳されてきている。知能検査で測定するデータでは得点が高くと、実際は就職できない、引きこもりになっている等、現実適応のよくない症例では、「適応行動」尺度の点数が低い場合がある。日本版 Vineland-II 適応行動尺度は、発達障害の支援のためのアセスメントツールとして、近年注目されており、知能ではなく「適応行動」を測定する。バインランド発達検査の初版はエドガー・アーノルド・ドル(Edgar Arnold Doll)によって開発され、バインランド2, 3はサラ・スパロー(Sara S.Sparrow)らによって改訂、刊行された(Kerri L. Staples, 2012)。母親など養育者へのインタビューで回答でき、普段の生活での様子について質問をする。

(a) コミュニケーション (b) 社会化 (c) 日常生活(対人、家庭内、地域)の3つについて分析する。このように近年では「知能」のみを取り上げる研究ではなく、発達障害などの事例の障害に即した調査方法を開発し、処遇に貢献するための検査の発達や研究に力が注がれている。

3. ティチナーについて

ここで松本が授業に取り入れていたティチナー(Edward Bradford Titchener)について述べる。ティチナーはオックスフォードでまず教育を受け、その後ライブチッヒでヴェントの指導を受けた。当時彼は25歳であったが、博士号の取得後コーネル大学の心理学コースで実験室を齎として研究を始めた。ティチナーの心理学は「(イ)意識の中になくはないものは厳密には心理学の対象にはならない(ロ)意識の内容を十分にとりあつかうことのできる唯一の方法は内省である、ということをはっきりとしようとした」(ローバック、1956)。彼の実験心理学は、心理学を科学とし、数学や物理学のように「純粹」なものとしようとした。そのために実験装置の組み立てや機械の操作など実験心理学における実験のやり方を細かく大学生に指導した。彼は応用心理学が流行したとしても、そのような道にそれることを許さなかったと言われる。彼の心理学は構成主義といわれる。内省(Introspection)を研究の柱としたので内省心理学と呼ばれることもある。彼のもとで学び博士号を取得した心理学者は54名おり、それぞれアメリカの心理学の世界でそれなりのポストについていた。アメリカで初の女性心理学者、博士号取得者(1894)といわれるマーガレット・ウォッシュバーンは彼の学生である。彼は1904年から1926年にかけてアメリカのあちこちで実験の会合を開き、内省を基礎とした実験心理学を伝えていった。その弟子にはE.G. ボーリングがいる。ティチナーによれば感覚は「強度 intensity」「品質 quality」「持続時間 duration」「範囲 extent」の4つの特性を持っている(Christian Beenfeldt, 2013)。

4. 明治大正時代の知能検査

明治時代に輸入された知能検査は、三田谷啓によって1915年『学齡児童智力検査法』『学齡児童智力検査函』として発売された。また、久保良英、鈴木治太郎、田中寛一らによって日本版が作成され、販売された。1925(大正14)年には、鈴木ビネー式知能検査が標準化された。1910年代は、教育会の夏期講習や心理学研究会でビネー式知能検査が紹介された。1920年には父母に向けた心理学の雑誌『親の為』で心理検査が紹介され、久保の改訂したビネー式「知能検査用具」が宣伝されている(鈴木、2007)。

松本の恩師となる元良勇次郎は、1907年「遅性児童教育研究所設立趣意書」を発表し、低能児に代えて遅性児という名称をすすめていた。この研究会からは特殊教育に従事するものも現れた。わが国では「学制」

(1872・明治5年)の制定後、障害児(特に重度の)は就学を免除されていたが、知能検査が開発される以前は障害児の処遇は困難を極めていたと想定される。竹中(2013)によれば、「学制」を制定した明治政府は財政基盤が弱く、岩倉使節団が渡欧中の留守政府が作成したため、訂正が相次ぐなど誤謬も多かった。その時点で「癡人学校」の記述はあるもののそれ以上の文言は書かれていなかった。その後明治政府は1879(明治12)年に「教育令」を公布した。案の段階では盲学校、聾啞学校、改善学校を掲げていたが、法制局の審議過程で却下された(白井、2019)。1880(明治13)年の「改正教育令」では障害のある子供について、受け入れできる学校がない場合に限り、事故として不就学が認められた。1886(明治19)年、「第一次小学校令」により義務教育の文言が初めて登場した。この時不就学の手続きを届け出制から許可制に変えた。1890(明治23)年、「第2次小学校令」により市町村に盲啞学校を設置することを可能とし、私立の盲啞学校については府県知事の許可で設立できるようにした。この時就学の猶予又は免除を保護者が市町村長に申し立てし、市町村長は「検査ヲ行フコトヲ得」つまり検査をしてそれを許可する制度となった。教育関係の論文ではこの時実質的に障害児は義務教育の対象から外されたと述べることが多い。1900(明治33)年には義務教育が無償化し、就学率が向上した。「第3次小学校令」では病虚弱児は就学猶予、知的障害児・肢体不自由児・聴覚障害児・視覚障害児は就学免除と規定された。この後篤志家による私立盲啞学校などの設立が相次いで起こった。1907(明治40)年には文部省訓令第6号で師範学校に盲人、啞人、心身発達不全の児童のための特別学級を設けることを推奨した。東京高等師範学校附属小学校の第3部に補助学級の名を冠し1908(明治41)年に障害児のための学級が設けられた。松本は東京高等師範学校の非常勤講師をしていたため、これらの動きに関係していたと考えられる。当時の小学校で問題となっていた鈍児、劣等児、低能児(当時の記述名そのまま)の教育について、東京大学の元良勇次郎も相談に乗っており、研究の必要性を痛感していた。元良や松本の障害児とのかかわりは当時の教育、特に小学校の教育との関連で社会からの要請に答えたものだと考えられる。

鈴木ビネー式で知られる鈴木治太郎は、滋賀県の小学校教諭から職歴をはじめ、1903年から1919年ごろまでは学業不振児の研究と教育の実践を行っていた(中村・大川、2003)。ビネー式作成に着手したのは1920年(大正9)であった。内外の資料のほかに独自の創作問題も作成した。5年の時間をかけ、大阪地域の児童3814名に実施しテストの完成を見たのが

1925年(大正14年)であり「智能測定尺度の実験的統計的基礎」である。その後統計的な整理を経て、1930年(昭和5)に刊行されたのが鈴木ビネー式知能検査であった。この鈴木ビネー式知能検査は、子息である鈴木治夫氏の許可を得て上越教育大学副学長小宮三彌氏らを中心に改定され、2006年に改訂版鈴木ビネー検査として刊行されている。

松本の弟子にあたる田中寛一は1882(明治15)年生まれ、岡山県師範学校、東京高等師範学校を卒業した。恩師の松本亦太郎を慕って京都帝国大学哲学科に入学した。松本が東京帝国大学の教授となると、田中は東京帝国大学大学院へと進学した。1919年に文学博士の学位を授与されたのち、東京高等師範学校の教授となる。1926年に「教育的測定学」を刊行した。田中は教壇に立っていた経験から、教師の山勘的な指導ではなく、正しいアセスメントに基づく教育法の開発のため、知能研究を志した。研究やデータ収集は進んでいたが、日本が第二次世界大戦に突入していた時節柄、公表ができず、田中ビネー式知能検査は1947(昭和22)年に公開された。こちらは財団法人田中教育研究所を設立し、田中寛一没後もテストの改訂が続けられ、2003年「田中ビネー知能検査V」として現在も使用されている。その時期の「教育心理学」に関連する動きとしては、1926(大正15)年には、東京文科大学から雑誌『教育心理学』が刊行され、教育心理学の研究に注目が集まるようになった。

5. 元良と松本の研究

元良と松本は国語調査委員会の依頼により、1904年に「片仮名平仮名読み書きの難易に関する実験報告」をまとめている。当時日露戦争後の国威高揚と相まって起こった国字問題の解決にあたり文部省に設置されたのが国語調査委員会であった(佐藤・溝口、1997)。内容は「精神物理学的方法により」研究されたと解説されている。松本の帰国は1900年であるから、松本はアメリカ仕込みの実験心理学の腕を振るうことができた。西周について述べた論文でも触れたが、西の時代は学説の紹介が主であり、実験や実際の行動は学者のすることではない、との見解が主流であったが、松本の登場によりやっと実験をする心理学者が大学に現れ、その結果を公表できるようになった。元良も実験をしないわけではないが、まだ新しい「心理学」というものが何かを学生や大衆に知らせる活動が多く、講演や講義記録は啓蒙的な内容が多い。

6. 松本の「教育的心理学」

ここで 1915（大正 4）年に刊行された松本亦太郎、榎崎浅太郎共著の『教育的心理学』を紹介する。「教育的心理学の観念は今日においてなお明瞭ならず。普通心理学の便概を論説し、ことに多少教育上の注意を添加したるものごときでは、未だもって真の教育的心理学と称するに足らざるべし」との序文から始まっている。目次は「心理学研究法、心理学と教育学との関係、精神の身体的基礎、身体の発達、脳髓の発達、大脳の作用、精神の発現、発達の時期、認識、感覚、皮膚感覚、内部感覚、有機感覚、味覚、臭覚、聴覚、視覚、知覚、空間知覚、時間知覚、統覚、直観、統覚内容の分解結合、観念、記憶、連想、想像、思考、注意、興味、感情、感情の意義、簡短感情、情緒、情操、気質、意志、意志発達の準備、意志の意義、社会意志、精神作業、作業の分解、計算、言語、図書（読書）、作業の条件、練習、疲労、休息、睡眠、参考書」となっている。テキストの最初に心理学研究法を配置し、松本の実験心理学の推進者の特徴を見せているが、その後は一般心理学テキストのように感覚知覚心理学について述べている。特徴と感じられるのは意思発達、精神作業を重視していることである。精神作業は、内田勇三郎が内田クレペリン検査で重要視した要素であった。また疲労は松本の弟子でアメリカに渡った原口鶴子が博士論文のテーマに選んだものである。

「心理学と教育学との関係」では、教育は児童青年の心身の完全なる発達を目的とする。と述べ、子供の発達の状態を把握する方法は心理学である。子供の心身の発達に合わない指導法は子供を害する可能性がある。また十分な教育効果を及ぼさない場合がある。子供を指導するにあたり、発達の時期を把握し適切な指導法を考える方法が心理学である。教育学は教育の目的及び理想や計画を立てるものである。だから心理学と教育とは密接な関係にあるが、心理学だけでその教育の目的を達するものではない。教育学が建てた理想や目標を青年に当てはめたとき、現実の青年がその理想を果たすことができるか、その材料を与えるのが心理学である（安齊による現代語訳）。「心理学は教育学の基礎科学なりと云ふを得可し。」と松本は述べている。

共著の榎崎浅太郎は松本が京都帝国大学の教授時代の教え子で、京都では「外部意志動作の発達」など意思の研究をしていた。榎崎は雑誌『心理研究』に女子生徒を対象とした精神動作学研究などを投稿していた。また入試選抜に心理検査を用いる研究もしており、榎崎は 1924 年には『選抜法概論』中文館、を刊行している。榎崎はいわゆる松本の愛弟子とあってよい存在

であり、共著となっているがこの本は松本を思想を反映していると考えられる。

松本の活躍後期には日本は戦争に突入してしまったため、この理想の心理学の姿が現実のものとなっていくためには、第二次世界大戦後の発展を待たなければならなかった。

今後の課題

本論ではコロナ渦のため各種図書館などに行くことができず、資料の不足のため触れられない点が多く残った。知能検査と障害児の関係については資料の発掘・検討は今後の課題としたい。

註；本論では現在では差別用語ととられる用語があるが、歴史的検討が目的であるため、そのまま使用した。

文献（提示順）

佐藤達哉・溝口元編著 1997 通史日本の心理学 北大路書房

安齊 順子 2007 「知能」『あたりまえの心理学』文化書房博文社

昇地三郎監修、長尾勲他編 1987 新教育心理学 ナカニシヤ出版

Kerri L. Staples 2012 The Vineland Adaptive Behavior Scales (VABS), **International Review of Research in Developmental Disabilities**

ローバック著 堀川直義、南博訳 1956 アメリカ心理学史 法政大学出版会

Christian Beenfeldt 2013 The philosophical background and scientific legacy of E.B. Titchener's psychology : understanding introspectionism New york:Springer

鈴木朋子 2007 「大正時代の心理学」『あたりまえの心理学』文化書房博文社

竹中暉雄 2013 明治五年「学制」通説の再検討 ナカニシヤ出版

白井健次 2019 法令等にみる教育制度の変遷と障害児教育 立正大学社会福祉研究所年報 第 21 号、p105-136.

中村淳子・大川一郎 2003 田中ビネー知能検査開発の歴史 立命館大学人間科学研究所、第 6 号、p93-111.

松本亦太郎・榎崎浅太郎 1915 『教育的心理学』日本学術普及会